
FAIRYTAIL ~ 過去の記憶は未来の希望へ ~

マクレーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRYTAIL〜過去の記憶は未来の希望へ〜

【Nコード】

N4769Z

【作者名】

マクレーン

【あらすじ】

大事な仲間を殺された
復讐の為に生きようと決めた少年は、新たな仲間に出会った。
フェアリーテイルで少年は変わる

基本的には主人公サイドで原作に沿って進めます。オリ話もあります。

オリキャラ紹介part1（前書き）

更新しました

オリキャラ紹介 part 1

名前：スピアード・フルミネ

愛称：スピア

年齢：現在20歳 FT加入時14歳

性別：男

好きなもの：仲間 睡眠 アオイ

嫌いなもの：闇ギルド 不眠

魔法：剣技

追憶・剣閃

縦横を光速で斬る。剣の残像が光のように見える

追憶・十六夜

剣先から無数の分解組織を放出し、敵の体を削り取る

追憶・雷神剣

雷系の魔法を剣にまとい相手を斬る

追憶・車軸

剣先に力を集中させた突き

雷系魔法

レイジングボルト ラクサスの技。直接ラクサスから教わった。

紫電方天戟 両手に紫電を貯め刀にまわせ、柄と切先を両手で持ち投げる。

紫電拳

紫電をまとった拳で、相手を連打で殴りつける。

容姿

金髪のツンツンした髪

ルーナセラフィという白色のコートのような服の上下

コートの下に黒のシャツ

首には十字架のネックレス

紋章は首の左側

名前：アオイ・アクナス

年齢：享年14歳

性別：女

好きなもの：甘いもの スピアード

嫌いなもの：虫

魔法：剣技 水系各種魔法

容姿

茶髪のボブ

ヘソだしTシャツ

デニムのショートパンツ

剣の使い手。 6年前、闇ギルド黒い天使達に殺害された。 禁忌魔法
ソウルチェンジ
魂転生の効果で意識だけが、刀に残った。

名前：ガンマ・ゲレム

年齢：現在20歳

性別：男

好きなもの：金

嫌いなもの：酒 タバコ

魔法

ガンズマジック
銃弾魔法

パラライズブリッド
麻痺弾

フレイムブリッド
火炎弾

アクアブリッド
水流弾

サンダーブリッド
雷弾

貫通弾

敵を痺れさせる魔法の弾丸

火属性の弾丸

水属性の弾丸

雷属性の弾丸

硬い装甲も貫通させる弾丸

容姿

白髪で長身

ファー付きの白いコート
紋章は背中 蛇姫の鱗
黒いズボン

オリキャラ紹介part1（後書き）

はじめまして！

人生初小説です。

いたらないところもあると思うので、ご指導の程よろしく願います。

フェアリーテイル加入

マグノリア

一つの建物の前に一人の少年が立っていた。

「ここが…フェアリーテイルか」

背負っている刀は少年の体より長く、刃先は地面についている。

刀の柄を握り目を閉じる。

「入らないの？」

声が聞こえるが周りには誰も居ない。気のせいではない。

そう、刀が喋っているのだ。

「ん？ああ、お前の事どう説明するかを考えてたんだ」

そう言いつつ、ギルドの扉を開けた。

扉を開けると、騒音とともに熱気が顔を襲った。

少し歩くと、数人が少年に気づき静まった。

「見ない顔だな……誰だ？」

その声が聞こえたが、気にせず歩く。

カウンターらしき所に座っている老人に、他と違う何かを感じた。

「すみません、フェアリーテイルというギルドはここですか？」

「そうじゃ。お前さんは誰じゃ？」

「スピアード・フルミネです。スピアと呼んでください」

「では、スピア。お前さんはなぜここに？」

「あの、このギルドに入りたいのですが…」

「ああ、構わんよ。来る者拒まずじゃ」

「ありがとうございます」

「ワシはこのギルドのマスター・マカロフじゃ。まあ、気楽にやっ
ていけい」

「解りました。よろしくお願いします」

と、握手を交わす。

「ところでスピア。お前さんはどんな魔法を使うのじゃ？」

「剣技なら誰にも負けません」

「ふむ、大した自信じゃの。どれh…」「オレと勝負しろ！」…「

マカロフの話の途中に駆けてきた少年がいた。

桜色の髪にツリ目。鱗のようなマフラーをしている。

「君は？」

「オレは、ナツだ。よろしくな！」

と、少年は笑った。

「あ…スピアード・フルミネです。スピアと呼んで下さい」

「よし！スピア、オレと勝負しろ！」

いやいやいや……いきなりかよ！

「おいナツ。そういうのは後にしろ」

スピアの後方から、声がした。

見ると鎧を着た、赤い髪の少女がいた。

「スピアと言ったな。私はエルザだ。よろしく頼む」

随分としっかりした人だな

「こちらこそよろしくお願いします」

エルザと挨拶をすると、他のメンバーも集まってきた。

「オレはグレイ・フルバスターだ。よろしくな」

「よろしく願います。って……何でパンツ一丁なんですか？」

「はっ！しまった！」

「ププププ」

パンツ一丁のグレイを見てナツが笑っている。

「なんだよ！ツリ目！」

「あ！？やんのかタレ目変態！」

うわ。ケンカかよ

「あの、ケンカ……やめんかあ！」……ふっ……！

バキッ！

ボコッ！！

ナツとグレイのケンカを止めようと、エルザが割り込んだが

近くにいたスピアまで巻き込まれた。

「まったく！お前らは礼儀をわきまえたらどうだ！……ん、どうしたスピア？」

いつ……痛てええ

「い……いや、大丈夫です……」

「そうか。ならいいんだが」

何だこのギルドは……

「新入りだつてえ？」

白い髪にポニーテール、へそ出し少女が現れた。

「相手してあげるよ。かかってきな」

うわ、不良だ

「よせミラ。お前じゃ勝てない」

「アア？やんのかエルザア！！」

「上等だ！ミラ、かかってこい！」

いやいやいや。あんたらもケンカかよ！！

バキッ！

ボコッ！！

「って……誰も止めないんですか？！」

「無数の剣戟けんげきを一瞬にして……見事」

とマカロフが言う。

刀を背中に戻し、一息つく。

「……ふう」

周囲の視線がスピアに集まっている。

あっ！またやっちゃった……

「「「スゲエエエエ！」「」「」

えっ？

「スピア、スゲエな！オレにも教えてくれよ！」

「馬鹿か、お前にできるわけねえだろナツ！」

「やってみなきゃ、わかんねえだろ！」

バキッ！

ボコッ！！

「……本当に騒がしいギルドですね」

「ああ。だが、ここにいると心が安らぐ。そうだろう？」

エルザに問われ、スピアは迷うことなく答えた。

「はい！俺、このギルドに来て良かったです」

「「「ようこそ！妖精の尻尾へ！」」」

フェアリーテイル加入（後書き）

いやあ、難しいですね。

ルーシー加入まで過去話です。

蛇姫の鱗と闇ギルド

闇ギルドホワイトタイガー 白い虎

「な……何なんだコイツ」

震えた両手で銃を持ち、銃口を目の前の人物に向けていた。

金色のツンツンした髪

ルーナセラフィという白色のコートのような服の上下

そのコートの下には黒のシャツ

首には十字架のネックレス

そして妖精の尻尾のマーク

「どうする？大人しく軍隊に捕まるか、俺に倒されるか好きな未来を選べ」

「ひっ……うわああああ！！」

持っていた銃の引き金を引いた。

同時に弾丸と金属がぶつかる音がした。

弾丸は建物の壁に突き刺さった。

目の前の人物は刀を抜いていた。

「や……やめてくれ……」雑魚は修行に励め「……えっ？」

ドスッ

銃を持っている男の腹を殴り気絶させる。

マグノリア

「ん？スピアじゃねえか」

後ろから声がした。

「ああ、ナツ。仕事終わりか？」

俺がフェアリーテイルに入ってから、半年がたった。

相変わらず、うるさいギルドだが楽しくやっている。

「あい。ナツ、また街を壊したんだよ」

ハッピー。3ヶ月前にナツが拾ってきた卵から生まれた青い猫だ。

「やあ、ハッピー」

「スピアは何の仕事に行ってたの？」

「……闇ギルド潰しだ」

「スピアはホント闇ギルド潰しが好きだよね」

「好きではないけどな」

そんなこんなでギルドについた。

「おお、スピア。仕事はどうじゃった」

ギルドに入るなりマスターであるマカロフが訊ねてきた。

「まあ可もなく不可もなくです」

「そうか」

マカロフは酒を飲む。

「グビツグビツプハー」

「じっちゃん！オレには何も聞かないのかよ！！」

ナツが口から小さな火をはきながら言う。

「ん？ナツう！また仕事先で街を壊しおって！」

マカロフとナツの会話を聞きながら、リクエストボードに近づく。

リクエストボードには沢山の依頼書が貼ってある。

『子供向けの魔法教室』

『邪竜退治』

『深海の宝探し』

三枚の依頼書を取り、マカロフの元へ向かう。

途中ナツとすれ違った。

「仕方ねえ、仕事行くかハッピー」

「あい！」

「マスター。この三つ順に、3日で終わらせます」

「何じゃ？もう仕事に行くのか」

「さっきの仕事で遠方まで行っただので、金欠なんです」

「そうか。しかし、お主に頼みたい仕事があるんじゃない」

マカロフは酒入りコップをカウンターに置き言った。

「闇ギルドナイトキング夜の王を知っておるか？」

その名を聞いたとき顔つきが変わったことに、自分でも気づいた。

「バラム同盟黒い天使達ブラックエンジェルスの傘下の一つですね」

先日、俺が潰した白い虎ホワイトタイガーも傘下の一つだ。

「そうじゃ。そのギルドを蛇姫の鱗と妖精の尻尾で倒すことになった」

「夜の王程度のギルドなら俺一人で大丈夫ですよ」
ナイトキング

見栄ではない。実際、ホワイトタイガー白い虎より規模が小さい。

「詳しいことは判らんが、禁忌魔法を使い何かを企んでおるようなのじゃ」

禁忌魔法。歴史から抹消された、禁忌の魔法。

その言葉を聞いた途端、俺の体の震えは止まらなかった。

「…解りました。俺が行きます!」

「出発は二日後。ハルジオン集合じゃ」

マカロフがそう言い、カウンターにある酒入りコップをとり一杯飲む。

蛇姫の鱗と闇ギルド（後書き）

突如思いついた話ですが、ちゃんと考えてあります。
次回、スピアの過去について少し触れます。

禁忌魔法

ハルジオン

「潮風がいいなあ」

港町のハルジオンは海から陸に向かい風が吹いている。

「ふわあ。眠い」

大きなあくびをした後、ポケットから紙切れを取り出す。

ラミアスケイル
蛇姫の鱗からの選抜者の特徴が書いてある紙だ。

「マスター、もっとわかりやすい特徴を書けよな。白髪の男だけじゃ解るわけないじゃん」

紙切れから目を離し、周りを見渡す。

「あれかな？」

後方にいた、白髪の男に話しかける。

「あのラミアの方ですか？」

その男はスピアのに顔を向ける。

「ん？ああ」

その男も紙切れを見ながら言った。

その紙切れには、スピアの特徴がしっかりと書いてあった。

「妖精の尻尾のスピアードです。よろしく願いします」

軽く頭を下げる。

「蛇姫の鱗のガンマだ」

ガンマは言った。

「ガンマさん、今回の依頼について何か聞いていますか？」

「依頼主は地方ギルド連盟。報酬額は八万」。依頼内容は闇ギルド
ナイトキング
夜の王の行おうとしている事の解明と阻止」

ガンマは淡々と語った。

「他に何か知りませんか？」

「……他に？」

怪訝そうな顔をしている。

「禁忌魔法についてです」

「いや、何も知らない」

ガンマはそう言い歩き始めた。

「きゃあああ！」

突然、女性の叫び声が聞こえ振り向いた。

「誰か、カバンを取り返してええ！！」

ひったくりか。

スパア達と同じ方向に走ってきたので止めようとするが、ガンマに止められた。

「よせ。ここでひったくりを捕まえたら、軍隊に引き渡さないといけない。時間がかかる」

「目の前で犯罪を見て、ほっとけって言うんですか！」

「俺はこの後も仕事があるんだ。時間をとらせるな」

「仕事はキャンセルすればいいじゃないですか！」

すると、ガンマはスパアの胸ぐらをつかんだ。

「あのな、俺たちは魔導士だぞ。金にならない仕事をしてどうするんだ」

「金になるならないが大事じゃないだろ！」

「話にならない。勝手にしろ、俺は先に行く」

「勝手にしますよ」

しばらく睨みあった後、ガンマはスピアの胸ぐらを離し歩いて行った。

「何なんだよ、アイツ」

スピアはそう言いながら、こちらに向かって走ってくるひったくり犯の腕をとり、投げ飛ばした。

「うおっ?!」

「金、金づるさいんだよ!」

ひったくり犯を蹴る。

「なっ…なんだよ!」

「ご苦労様です」

軍隊に犯人を引渡す。

「すみません。魔導士さんにご迷惑をおかけして」

おそらく新人であろう軍人が言う。

「いえ。魔導士も軍人も関係ないですよ」

「何かあれば言って下さい。ご協力します」

その軍人が敬礼をしながら言う。

「じゃあ、一つお願いしていいですか？」

「どうぞ」

敬礼をやめる。

「闇ギルドナイトキング夜の王についてです」

「解りました。こちらへどうぞ」

軍人が歩き出す。

「あ、あの。あなたの名前は？」

「ミハエルです。あなたは？」

「フェアリーテイルのスピアードです」

ミハエルから聞いた情報を頼りに、ハルジオンの北西にある夜ナイトキングの王に向かった。

ギルドの周りは岩場で、周りには何もない。

ギルドの真正面にある大きな岩陰に、ガンマが居た。

「ガンマさん。何か変わった様子は？」

後ろから話しかけられたガンマは、スピアだと気づくと一瞬戸惑いながらも答えた。

「……特に何もない」

ガンマの横にしゃがみ、岩陰からギルドの様子を見る。

しばらくすると、ギルドの中から人が大勢出てきた。

「あれは？」

スピアは横にいる、ガンマに聞いた。

「夜の王の連中だろうな……真ん中の上半身裸の奴がいるだろ」
ナイトキング

ガンマが指を指す。

「はい」

「あいつは、ファイ。ナイトキング夜の王の実質的なリーダーだ。奴は元々巨人タイタの鼻ノーズってギルドに所属していたんだが、金の亡者でな。依頼料が高い、暗殺依頼……本来はそんな依頼が有ること自体遺憾なことなんだが……ばかりを選び、外道落ちした。」

外道落ち。闇ギルド入りすることだ。

スピアはガンマを見つめる。

「…何だ？」

「いや、よく調べてるなあ〜と思って」

「…金のためだ」

二人がそんな会話をしていると、ファイ達に動きがあった。
魔導四輪に乗っている。

「ん？ 奴等、どこに行くんだ」

「追いかけましょう」

「ああ」

ファイ達が魔導四輪でハルジオンに向かったのは、方角で判ったが
スピアとガンマは走りだ。追いつけない。

二人がハルジオンに戻ってきた頃、街は既に夜の王に占拠ナイトキングされていた。

軍や評議院がいたが、皆倒されている。

「見つけたぞ、ファイ！」

ファイは、二階建ての家屋の屋根に立っていた。

「あ？誰だ、てめえ」

「俺はフェアリーテイルのスピアードだ！」

「スピアードだあ？……聞かねえ名だなあ。子供は家^{ガキ}に帰^{ウチ}んな」

スピアとファイが睨んでいる間に、ガンマが入ってきた。

「オイ、正面から攻めんじゃねえよ」

スピアの後ろに、ガンマが並んだ。

ファイは、スピアの後ろに居る人物を見た。

「ん？お前はガンマじゃねえか」

「……」

「どうした？俺らの仲間にもなりに来たか」

「ガンマさん、知り合いなんですか？」

ガンマに聞く。

「知り合いって程のもんじゃねえよ。コイツはよ、金の亡者として裏社会ではちょっとした有名人なんだぜ」

答えたのはファイだった。

「何度も誘ってやってんのによ、コイツ『外道にはなりたくない』だよ。ふざけてるぜ」

ファイが両手を広げ、呆れ顔をしている。

「……ふざけてなんかない」

「あ？」

「ガンマさんは、ふざけてなんかない！」

大きな声で怒鳴ったのはスピアだった。

「確かに、ガンマさんは金の亡者なのかもしれない。だけど、魔導士として大事なことを知っていた！！」

「大事なことだあ？」

「魔導士の…魔法の力を人殺しなんかに使っちゃいけないって事だ！！」

「知らねえよ、そんな事。……オイ、そいつら殺っちまえ」

ファイは、そう命令すると屋根の向こうに消えていった。

「あ、待て！」

スピアが叫ぶが、声は届かなかった。

「ファイさんの邪魔はさせねえ」

命令をされた、闇ギルド団員が言った。

「殺っちまえ!!」

「うおおおお!!」

そう叫びながら、五十人ほどの団員が攻めてきた。

「……ガンマさん。追ってください」

「何？」

「アイツはガンマさんが倒してください。この数は、ガンマさん一人じゃ無理です」

「無理って…お前こそ一人じゃ無理だろ」

「いいから、行っして下さい!!」

「……分かった。ここは任せたぞ」

そう言うとガンマは走って行った。

「おいおい。子供ガキ一人で大丈夫なのか？」

闇ギルド団員が挑発してくる。

「さて。ガンマさんも居なくなっただし…」

そう言いながら刀を抜いた。

「闇ギルド潰し、始めるか」

「OK！やつちゃって！！」

刀が喋る。

「行くぜ、アオイ！」

刀の鎬から切先を左手で、なぞる。

「追憶・剣閃！！」

右から左へ、光のような速さで相手を斬る。

「うわああああ！」

これで十人は減ったな

「囲め！！」

スピアの周りを残りの奴等が囲む。

前後左右から、一人ずつ襲ってくる。

全員、剣を持っている。

スピアはまず、前方の敵を斬る。

次に、右の敵の顎に右足で蹴りを食らわせ

刀を持つ手を背中にまわし、刀で後方からの攻撃を防ぎ

右足の踵で、顔を蹴り

左の敵を斬る。

その間、三秒。

「何だ、コイツ。強ええ」

闇ギルド団員を倒した後、ガンマを追ってハルジオンの街を出た。

街を出てすぐの所に二人は居た。

「ガンマさん！」

そこでは、ガンマが倒れていた。

「……す、すまねえ。コイツには俺の魔法が効かねえ」

ボロボロになった体で、ガンマが言う。

「口ほどにもなかったぜ。ソイツ」

ファイはスピアに向かって言う。

「最後に一度だけ、仲間に誘ってやったんだがな。そいつ、もう金はいらねえだよ」

「……？」

「俺にはもう金はいらない。今なら金より大事な物が分かる気がするんだ……それは多分、俺という人間を理解してくれる仲間だ！だってよ」

スピアはガンマを見る。

「ガンマさん……」

「まったく、ふざけてるよな。笑えるぜ」

そう言った後、ファイが高笑いをする。

「笑えねえよ！」

スピアは、ファイに向かい切りかかる。

「フツ。ロックメイク……」

ファイが右手をかざす。

「シールド
盾！」

ファイの目の前に岩の壁が現れて、スピアの剣戟を防いだ。

「ロックメイク…ハンマー！」

スピアの頭上にハンマーの形をした岩が現れた。

「消えろおお！！」

スピアは刀を上に掲げた。

「この大きさ、大丈夫か？」

「楽勝、楽勝」

「追憶・十六夜^{いざよひ}！！」

ズドン！！

衝撃が走る。

「フハハハ！」

「スパード！！」

ファイ、ガンマが叫ぶ。

すると、ハンマーの形をした岩が液体のように溶けて消えた。

「な…何？！」

さすがのファイも驚いている。

「……十六夜^{いっぺん}って技はな、剣先から無数の分解組織を放出して個体を分解する技なんだ」

「何だと!!」

「さあ、行くぜ!!」

ハアアアと叫びながら、ファイに斬りかかる。

「クソッ！ ロックメイク…盾^{シールド}！」

「無意味だよ。十六夜^{いっぺん}！」

ファイの前に現れた岩の盾も、十六夜によって分解される。

「フェアリーテイルには氷の造形魔導士がいる。俺より年下だが、お前よりしっかりした魔法を使うぜ」

その言葉はファイには届いていない。

「追憶・剣閃!!」

スピアの渾身の一撃がファイに当たる。

「ガハッ」

ファイはそのまま崩れ落ちた。

「…ファイを倒した？」

ガンマが体を引きずりながら、近づいてきた。

「……大丈夫か？……スピアーデ」

「ガンマさん、怪我してるんだから動かないでくださいよ」

よろけるガンマに肩を貸し、歩く。

「街に軍隊が常駐しているはずだから、コイツを捕まえてもらわないとな」

「そうですね」

「……ま……待てよ……」

後ろから声がした。

振り返るとそこにはボロボロになりながらも立ち上がる、ファイがいた。

「て……てめえらを……こ……ろすまでは……」

虚ろな目をしている。

「死なねええええええええ！！」

突然叫んだ、ファイに危険を感じた。

スピアは刀を抜いた。

ガンマも、痛みが引いたのか武器である二丁拳銃を取り出す。

「おもしろい……ものを……を見せてやる……！」

そう言いながら、ファイは傷口の血を指に塗り

体に文字を書いた。

「ローグ文字？」

ガンマが言う。

文字を書き終わると、両手を合せ呪文を唱えた。

「アメラ・カジヌ・サドル　ダゴゲ・ナーバ・バリエ　マグリ・ヤ
トメ・ラジゴ」

体に書いた文字が、魔方陣になり浮かび上がった。

「グオオオオオオオ……！」

獣のような雄叫びと共に、ファイの体が変化していった。

両手は細長くなり、先は二つに分かれ針がついている。

下半身はサソリのように、左右に足が三本つづ生え尻尾も生えてい
る。

尻尾の先にも針がついている。

「これが、禁忌魔法なのか？」

ガンマが聞いたが答える事はなかった。

「フハハハハ！！死ねえええええ」

尻尾の先の針が、ガンマに迫る。

見た目はサソリってことは……毒針？！！

「危ない！！！」

ガンマを突き飛ばす。

ブシュツツツ

尻尾の針がスピアに刺さっていた。

「ガハツツツ」

「スピアド！！！」

崩れ落ちるスピアをガンマが支える。

「フハハハハ！！！」

サソリのような姿になった、ファイが高い位置から見下して言う。

「次は、お前だ」

禁忌魔法（後書き）

過去に触れるまでは書けなかったので、次回に回します。

あと、雷竜方天戟の件も解決します。

スピアード&ガンマVSファイ（前書き）

反省点

- ・今回モンハンみたいだ…

スピアード&ガンマVSファイ

目の前にいる大きな敵に、ガンマは技を連発していた。

ガンズマジック バラライズブリッド
「銃弾魔法・麻痺弾!!」

敵を痺れさせる効果をもつ弾丸だが、ファイには全く効いていない。

こんな敵、倒せねえよ……

「……あきらめるな」

心の声が見破られたのかと思った。

「スピアード! お前大丈夫か!」

「大丈夫です。毒なんかで、俺は死にませんよ」

そうは言ったが、正直キツイ。

「俺が特攻します。援護してください」

刀を構えて言う。

「わ…分かった」

さて、どうやってコイツを倒すか。

見た目はサソリのファイは、尻尾で攻撃を防いでいる。

ってことは……

「ガンマさん！尻尾に集中砲火してください！」

「分かった！」

そう言いながら、ガンマは二丁拳銃に弾丸を装填する。

「銃弾魔法・貫通弾！」
ガンズマジック

二丁拳銃から放たれた弾丸は、ファイの尻尾に当たるがダメージを受けていない。

「追憶・剣閃！」

右の三本ある足の手前を斬った。

手応えはある。

「何だア？」

しかし、ファイは無傷だった。

「クソッ！」

「フン！！！」

ファイの尻尾の薙ぎ被いで、刀がとばされる。

「チッ！」

無防備で敵の近くにいるのは危ない。

直ぐに離れようとしたが、尻尾で飛ばされた。

「うわあああっ！！」

「スピアード！」

相変わらず弾丸を撃ち続けるが、効いていない。

「どうすれば……倒せるんだ？」

「ぬわあああ！！」

ガンマが尻尾でとばされる。

「どうすれば……」

バチバチッ

何かの音がした。

バチバチッ

音がした自分の右手を見ると、紫色の雷が鳴っていた。

「これって……まさか？」

武器もなく、ファイの尻尾で狙われているガンマを確認した後
地面に刺さっている刀を手取る。

刀の柄と切先を両手で持つ。

「頼むぜ…俺の魔法……」

眼を閉じて両手に意識を集中し、力を集める。

バチバチッ

眼を開けると、両手には紫色の雷が鳴っていた。

そして、その雷を刀にまとわせる。

「いくぜ……」

遠くでは、今まさにファイが毒の尻尾でガンマを刺す瞬間だった。

「届け！……」

刀を槍のように、ファイをめがけて投げる。

紫色の雷をまとった刀は、一直線にファイに向かっていく。

「消える……！……フゴッ……」

ファイの右目に刀が刺さった。

「グワアアアア！！！！！」

刀が刺さったと同時に、雷がファイの体を包む。

そうか！

「ガンマさん。奴の弱点は雷属性の技です！」

そう言いながら、ガンマの二丁拳銃を拾い投げる。

「もう一度行きます！援護してください！」

尻餅をついていた、ガンマも

「任せろ！！」

と言い、銃に弾丸を装填した。

ガンズマジック サンダーブリッド
「銃弾魔法・雷弾！！」

二丁拳銃から放たれた弾丸は防御した尻尾を突き抜け、生身の上半身へしっかり当たった。

その直後電撃が流れる。

「グワアアアアツツ！！」

苦しむファイの体を昇り、生身の体を殴る。

もちろん、雷をまとわせて。

「ガハッ！」

ファイが血を吐く。

今がチャンス！

連打でパンチを叩き込む。

「ガンマさん！決めてください！！」

苦しむファイから離れ、ガンマに叫ぶ。

「銃弾魔法・最大出力！！」
ガンズマジック

二丁拳銃が光っている。

「全魔力解放！！雷弾！！」
サンダーフリッド

激しい轟音が、ファイの体を襲う。

そして、ファイは音も無く崩れ落ちる。

禁忌魔法が解けたのか、普通の体に戻っている。

ドスッ

ファイとスピアが地面に落ちる。

「……やった」

スピアは振り返り、ガンマを見る。

「やりましたよ、ガンマさん！」

「ああ」

ガンマも驚いている。

しばらく、自分達の勝利を喜んでいた。

そうだ…

「ガンマさん。軍隊の人、呼んできてもらえますか？」

「ん？ああ」

ガンマが足を引きずりながら、街へ向かう。

そして、スピアは倒れているファイに近づく。

丁度ファイは、目を覚ましていた。

「…俺は、負けたのか？」

「……ファイ。一つ聞きたいことがある」

返事はないが、気にせず話す。

「その禁忌魔法、どこで手に入れた？」

ファイは、何かを隠すように顔をそらした。

「……黒い天使達ブラックエンジェルスのバロンだ」

その名を聞いた途端、体が震えた。

バロン。その名を持つ男はかつて、スピアの大事な人間を奪った張本人である。

「俺は…バロンを含む、黒い天使達ブラックエンジェルスの奴らが恐れるような力が欲しいと思っていた……奴らの偉そうな態度には呆れていたからな」

ファイが語りだす。

「そんな時…バロンがこの禁忌魔法を教えてきた」

「バロンが？」

「……奴らの力を借りる事だけはしなくなかったが……奴らが教えた魔法で…奴らを倒せば……いい笑いものになると思ったんだ」

ガハツと血を吐く。

「……まさかこんな副作用があるとはな……」

スピア達の攻撃だけじゃない、何かのダメージを受けている。

まさか……

「……なあ子供……こんなこと言つのは可笑しいのかもな」

副作用の効果だろうか、体に皺が増えている。

「…………俺……死にたくねえよ……」

そう言った後、ファイの体はかつての若々しい体ではなく

まるでミイラのようになっていた。

三日後。

ハルジオンの病院でスピアとガンマは休んでいた。

ミハエルの情報によれば、ファイはミイラのような体のまま評議院管理下の病院で隔離されているらしい。

息はしているが会話はできず、まさに生きる屍になっていた。

「なあ。お前、雷魔法使えたのか？」

「俺も、初めて知りました」

隣のベットに寝ているガンマと、カーテン越しに会話をする。

「あれは多分、俺の魔法なんですな」

「…どう言う意味だ？」

「俺の刀には、ある人の魂が宿っているんです」

「!？」

「禁忌魔法・魂ソウル転生チェンジを知ってますか？」

「ああ。人と人、人と動物の魂を入れ替える魔法だろ。だけど、物に魂が宿るなんて…」

「……その、ある人が使ってた魔法なんです。剣閃や十六夜は」

「じゃあ、お前は……」

「魔力なんてもたないただの子供ガキでしたよ」

しばらく無言が続く。

「妖精フェアリーの尻尾には雷の魔法を使う奴がいるのか？」

「はい」

「じゃあ、そいつに弟子入りでもして雷魔法を基礎から学ぶんだな」

「ええ」

「次に会うときには、強くなってるよ」

「解りました」

シャー

カーテンが開いた。そこには、入院服ではなく普通の服を着たガンマがいた。

「俺の方の怪我は治りが早いからな。先に行くぜ」

「はい。あ、今度フェアリーテイルに遊びに来てくださいよ」

「わかった。じゃあな」

ガンマが背を向けて、病室から出ていく。

「あ、そうだ。スピアード」

「はい？」

「お前、敬語で喋ってるけど…俺も十四。同い年だぜ」

そう言い、病室を去っていく。

「同い年かよ！！」

心の中でツツコミながら、睡眠をとる。

退院後、フェアリーテイルの雷の魔導士に弟子入りし

過酷な修行生活を行なったのは、また別のお話。

六年前編　・完・

スピアード&ガンマVSファイ（後書き）

六年前編完結ですね。

雷の魔導士はラクサスです。

次回からは、ルーシィやらなんやら出てきます。

鉄の森

フェアリーテイル ギルド内

みなさん初めまして。私の名前はルーシィ。

最近ここに入ったばかりの星霊魔導士です

フェアリーテイルってギルドはとにかくいつもドンチャン騒ぎで、

でも、とても楽しいギルドなの。

今もナツと 그레이が大喧嘩。

あれ？さっき出ていったロキが戻ってきた？

「ナツ！ 그레이！ マズイぞっ！！」

「「あ？」」

「エルザが帰ってきた！！」

「「ええーーーーーっ！！？？」」

え？ちよっ…何？ギルドの中が急に慌ただしくなってるんですけど。

ズシン！ズシン！ズシン！

何、この足音。

みんなの顔が引きつってるんだけど？

そして、入口から大きな角を抱えた赤い髪の女性が入ってきた。

「今戻った。マスターはおられるか？」

「お帰り！！マスターは定例会よ」

赤い髪の女性の問いにミラが答えた。

ミラさん。今はギルドの看板娘だけど、昔は相当暴れてたらしいの。

「エルザ…その、バカでかいのは何なんだ？」

エルザと呼ばれた女性に話しかけたのは、マックス。

砂の魔法を使うの。

「ん？これか…討伐した魔物の角に、地元の者が飾りを施してくれてな……綺麗だったのでここへの土産にしようと思ってな……迷惑か？」

「い…いえ！滅相もない！！」

両手を振りながら、マックスが後ろに下がっていく。

「それよりお前たち！」

エルザ声に、ギルド内が静まった。

「また、問題を起こしているようだ。マスターが許しても私は許さんぞ!」

ヒイイツと何処からか聞こえたのは気のせいかしら?

「カナ!」

「う」

「なんとなく格好で飲んでいる!コップを使え!」

「ビジター!」

「ビクツ!」

「踊りなら外でやれ!」

「ワカバ!」

「うお!」

「吸殻が落ちているぞ!少しは禁煙しろ!」

「ナブ!」

「うつ」

「依頼板リクエストボードの前をウロウロするなら仕事に行け!」

「マカオ！」

「はいい？」

「すまん間違えた」

「間違えるなよー！」

「まったく…世話がやけるな。今日のところは何も言わずにおいてやろう」

ずいぶんいろいろ言ってたような…

「な…何、この人」

「エルザ！とっても強いんだ！」

この猫はハッピー、世にも奇妙な喋る猫なの。

この前ハッピーにそのことを言ったら

「スピアの刀も喋るよー！」

って。何言ってるのか分からないわ。

「ところで、ナツとグレイはいるか？」

「あい」

ハッピーが指さす方向に、肩を組んだナツとグレイがいた。

「や…やあ、エルザ…オレたち今日も仲良し…良く…や…やってるぜい…」

「あい…」

「ナツがハッピーみたいになった!!」

あのナツが？信じられない！

「そうか…親友なら時にはケンカもするだろう…しかし、私はそうやって仲良くしてるところを見るのが好きだぞ」

「あ…いや…いつも言ってるけど…親友ってわけじゃ…」

「あい…」

こんなナツ見たことないわ!!

「ナツもグレイもエルザが怖いだよ」

「ミラさん!」

「ナツは昔、ケンカを挑んでボコボコにされちゃったの」

「まさかあ!?!あのナツが!!?」

「グレイは裸で歩いているところを見つかってボコボコに…」

「それは自業自得な…」

「ロキはエルザを口説こうとして半殺し」

「……」

「でも、エルザも昔ボコボコにされた事があるのよ」

「誰にですか？」

「スピアード・フルミネ…今は仕事でいないけど」

スピアード。何か名前からして怖そうな…

「二人とも仲が良さそうでよかった…」

「実は二人に頼みたいことがある」

「？」

「仕事先で少々やっかいな話を耳にしまった。本来ならマスターの判断をおおぐトコなんだが……早期解決がのぞましいと私は判断した」

「二人の力を貸してほしい…スピアも後から合流する…ついてきてくれるな」

「え？」

「はい!？」

ナツとグレイが声を上げると、ギルドが騒がしくなった。

「ど…どういう事!？」

「あのエルザがスピア以外を誘うなんて初めてじゃないか！」

「こんな角もつ怪物倒す女だぞ…」

騒がしい中、エルザが言った。

「出発は明日だ…準備しておけ…詳しくは移動中に話す」

「行くなんて言っただけさ…」

「行かないのか？」

凄い形相でエルザが睨む。

「行きます！」

「エルザとスピア。二人だけでも最強なのに…ナツとグレイ…」

「どうしたんですか、ミラさん？」

「これって…フェアリーテイル、最強チームかも…」

マグノリア駅 列車内

「あ…あの…お客様………」

乗務員の一人が爆睡している青年に声をかけている。

「ガアアアアア…プスウウウツツ」

すごい寝てる。起こすのが忍びない。

「お客様………終点ですよ……」

「すまない」

乗務員の後ろから声がした。

「ウチのギルドの者だ」

「あ、エルザさん。そうでしたか」

エルザは、爆睡する青年を担ぎ列車を降りた。

「すまない。エルザ」

列車で爆睡していた青年、スピードは頭をかきながら言う。

俺がフェアリーテイルに入ってもう六年になる。

「気にするな。いつものことだ」

いや、気にしますけどね……

ナツ達が待っているのは、線路を挟んだ向こう側のホーム。

なんかナツとグレイ、ケンカしてんな。

ハッピーと…誰だあの娘？」

「すまない待たせたか？」

エルザが声をかける。

「荷物多っ…！」

凄いツツコミだな、目玉でてるぞ。

とてもマネできん。

「ん？君は昨日、ギルドにいたな…」

「新人のルーシイと言います。ミラさんに頼まれて、同行する事になりました。よろしくお願いします」

なるほど新人か。てか、胸大きいな…

「私はエルザだ。よろしくな」

「あ、俺スパードだ。よろしくなルーイージ」

「いや…あの…ルーシイです…」

ルーイシイ？もうどっちでもいいや。

「そうか…ギルドの連中が騒いでいたのは君の事か。雪山に住む地面を掘る変態傭兵ゴリラの息子を倒したとかなんとか…頼もしいな」

「何か色々混ざってます!」

やるなルイージ!!

「今回は、少々危険な橋を渡るかもしれないが、君なら大丈夫だな」

「危険!?!?!?」

危険なのか!俺も聞いてないぞ。

「何の用事かはしらねえが、今回はついてってやる…条件つきでな」

条件?

「バ…バカ!!オ…オレはエルザの為なら無償で働くぜ…」

グレイ怖がりすぎだろ。

エルザなんてカワイイもんだぜ。

「帰ってきたらオレと勝負しろ!!」

「…えっ?」

ルイージ……じゃなかったルーシィ、ハッピー、グレイ

もちろん俺も驚いた。

「あの時とは違う！今ならエルザを倒せる！！それにスピア！お前もだ！！」

え、俺も？

「オ…オイ！はやまるな！！死ぬぞ！絶対！！」

グレイ、落ち着けよ……

「確かにお前は成長した。私は、いささか自信がないが…いいだろう受けて立つ」

「俺は、遠慮しとくわ」

「何だスピア、俺にやられるのが怖いのか？」

「なわけあるか。俺は、この後もすぐ仕事に行くんだ…お前と戦ってる暇なんかねえよ。それにお前、俺に一度も勝ったことねえだろ」

「だからやるんだ！」

「よさないかナツ。スピアはお前ほど暇じゃないんだ…グレイも私と戦いたいのか？」

「ブンブン」

首飛んでいくぞ、そんなに振ったら。

列車内

「はぁ…はぁ…はぁ…」

凄く酔ってるな、ナツ。

いや、俺は酔わないけどな何だか眠い……

「あ、あの…スピアードさんはどこに行っ たんですか？」

エルザ、 그레이、 ハッピーが指で上を指す。

「グウウウウウウスピイイイイイツツ」

「寝てる!!」

列車の金網でスピアードが寝ている。

「スピアは乗り物に乗ると何故か寝てしまうんだ」

寝てしまうんだ…

「仕事が終わるたびに駅に迎えにいかないと、一生帰ってこないんだよ!」

「ミラちゃんが迎えに行くのがほとんどだな」

ましな人だと思ってたのに、やっぱりフェアリーテイルの一員だね…

「そっぴゃあ…あたし…フェアリーテイルでナツ以外の魔法見たことないかも。エルザさんはどんな魔法を使うんですか？」

「エルザでいい」

「エルザの魔法はキレイだよ！血がいっぱいいるんだ！相手の」

「キレイなの？それ…」

想像すると…怖い…

「スピアの魔法は雷属性の中で最も破壊力を持つ、紫電を使うんだ…見せたほうがいいだろう」

いや、でもスピードさん。寝てますよ…

目の前にスピアの右手が現れ、紫色の雷が鳴る。

「ヒィィィ！」

「スピアは寝てても話は聴けるんだよ！」

なんて能力…

「グレイの魔法の方が綺麗だよ！」

あれ、今どこから声が？

「そうか？」

そう言つてグレイは左の手の平に右の拳を合わせて、冷気を集中させた…

そこには、フェアリーテイルのマークが氷で作られていた。

「うわあっ！」

「氷の魔法だよ！」

また、声が…

「あの、グレイ。さっきから変な声しない？」

「変な声？」

「アレのことじゃないのか？」

エルザが言う。

「ああ」

グレイは真上を指した。

「スピアが背負ってる刀があるだろ。あれが喋ってんだ」

「うそおおおー！ー！」

「嘘じゃないよ」

え？

真上を見て話かける。

「本当に？」

「本当だよ」

「私たちも初めて知った時は驚いた」

いやいや、驚くってレベルじゃないでしょ！！

「どうでもいいけどよ、そろそろ本題にはいろっぜエルザ……」

どうしてもよくない！！

「一体、何事なんだ？お前が人の力を借りるなんて、よほどだぜ」

「そうだな……話しておこう……」

エルザの膝で沈むナツに目をやり、話し始めた。

「先の仕事の帰りだ。オニバスで魔導士の集まる酒場に寄った時、少々気になる連中がいてな……」

エルザの回想

「コリアー！！酒遅せえぞ！！」

席に座り、オニバス特製ケーキを食べていると男の声が聞こえた。

「ったくよお、なにモタモタしてんだよ！！」

「す…すいません」

その男はネズミ顔の大男だった。

「ビード、そうカッカすんな」

「うん…」

同じテーブルに座っている葉巻を吸っている男と、太った男が声を上げる。

「これがイラつかずにいれるかってんだ！！せつかくラバイの隠し場所を見つけたってのに、あの封印だ！！何なんだよ！まったく解けやしねえ！！」

「バカ！！声がでけえよ！！」

「うん、うるせ…」

「くそお！！」

「あの魔法の封印は人数がいれば解けるなんてもんじゃないよ…」

「あ？」

四人の中で、今まで黙っていた男が声を上げた。

「後は僕がやるから、みんなはギルドに戻つてるといいよ……エリゴールさんに伝えといて。必ず三日以内にララバイを持って帰るって」

「マジか！？ 解き方を思いついたのか？」

「おお！ さすがカゲちゃん！！」

すると、カゲと呼ばれた男は酒場を出ていった…

気のせいか、その後を黒フードの男が尾行^{つけ}していた。

「と言う訳だ…」

エルザが話終わった。

「ララバイ？」

「子守歌… 眠り魔法か何かかしら？」

「わからない… しかし、封印されているという話を聞くと、かなり強力な魔法だと推測できる」

「話が見えてこねえな… 得体の知れねえ魔法の封印を解こうとしてる奴等がいる…… だかそれだけだ。仕事かもしれないし、なんて事ねえ」

「馬鹿だな、グレイ」

真上から声がした。

「うおっ！？スパア！起きたなら言えよ！ビックリするだろうが！」

「ビックリさせるつもりで言ったんだよ。エリゴールだぞ、死神エリゴール」

列車がオニバス駅についた。他の乗客が荷物を持ち、下車している。エルザ達も、荷物を持ち列車を降りる。

「魔導士ギルド鉄の森のエース、死神エリゴール」
アイゼンヴァルト

「し…死神！？」

ルーシー驚き過ぎた。ビビリルーシー略してビリー…

「ああ。暗殺系の依頼ばかりを遂行し続けた字だ…あだな本来、暗殺依頼は禁止されているんだが、奴らは金を選んだ」

「暗殺依頼…」

「そんなもん、依頼する奴がいる時点で許せねえな…」

そう言い、エルザに目を向ける。

話すのが疲れたから、代われサインだ。

「結果、六年前に魔導士ギルド連盟を追放され現在は闇ギルドとい

うカテゴリに分類されている…」

闇ギルド。俺がこの世で一番嫌いなもんだ。

「闇ギルドお!!?」

「ルーシー! 汁いっぱい飲んでるよ!」

「汗よ!」

汗なのか。俺も汁かと……

「なるほどなあ…」

グレイ…服きろよ…

「ちょっと待って!! 追放って、処罰はされなかったの!」

「されたさ。当時、鉄の森のマスターは逮捕されギルドは解散命令を出された…しかし。闇ギルドと呼ばれているギルドの大半が解散命令を無視して活動し続けているギルドの事なのさ」

「……帰ろっかな…」

「出た…」

「不覚だった…あの時、エリゴールの名に気づいていれば全員、血祭りにしてやったものを……!!」

「ヒイイイ！」

「そうか…その酒場にいた連中だけなら、エルザ一人で何とかなつたかもしれねえ…だがギルド丸々相手となると…」

그레이の視線が俺に向く。

「いや…鉄の森は正規ギルドの頃から、数が多いので有名だったギルドだ。流石に俺でも、一人でではキツイな」

スピアの言葉にエルザは頷く。

「奴らはララバイなる魔法を入手し、何かを企んでいる…
私はこの事実を看過することはできないと判断した…」

「鉄の森に乗り込むぞ…！」

「面白そうだな」

「新しい技でも、見せてやるよ」

「新しい技なんかないでしょ…！」

エルザ、 그레이、 スピア、そして刀のアオイの順で言った。

「来るんじゃないかった…」

ルーシイが肩を落とす。

「汁出すぎだつて」

「汁言っな…」

「で…鉄の森の場所は知ってるのか？」

「それを、この町で調べるんだ」

「雲をつかむような話だな…」

「あれ？」

「どうしたの？ルーシィ」

町を歩いていると、ルーシィが何かに気付いたように声を上げた。

「嘘でしょ！？…ナツがいないんだけど…！！」

「」「」「あ…」「」「」

俺、エルザ、グレイ、ハッピーも気付いた。

あ~~~~！！！！忘れてたあああ！！！！

「話に夢中になるあまりナツを置いてきてしまった！私の過失だ！とりあえず、私を殴ってくれないか…！！」

毎度のことだが、真面目だな…エルザ…

「という訳だ！列車を止めろ…！！」

「ど…どういつ訳？」

エルザ…いきなり駅員にそんな事言っても……

「フェアリーテイルの人はやっぱ、みんな、こーゆー感じなんだあ
…」

「オイ！おれはまともだぞ！！」

いや、グレイ服着るよ……

「仲間の為だ、分かってほしい」

「無茶言わんで言わんで下さい！降りそこなつた客一人の為に、列車を止めるなんて！」

エルザが駅員の後ろにあるレバーに目をやる。

『緊急停止信号』

おい…まさか…

「ハッピー」

「あいさー！」

「ちょっとお
…」

ジリリリリリ

激しいベルの音が響く。

「よし、ナツを追うぞ……！……すまない、荷物をホテル　チリまで頼む」

いや、駅員に頼むなよ。

列車を走って追うのは無理だよな……って、

「エルザ……あの魔導四輪を使おう……！」

駅前に止まっていた魔導四輪に飛び乗る。

エルザが運転席に、ルーシィとハッピーも慌てて乗る。

「おい！オレ乗ってねえぞ……！」

グレイが屋根に飛び乗る。

「飛ばすぞ……！」

エルザ……飛ばしすぎだ……あれ？何だか眠くなってきた……

「俺の車……！」

そんな声が聞こえた気がした。

鉄の森（後書き）

なんか俺も眠くなってきた……

魔導四輪は借りたんです（前書き）

エリゴールのキャラ崩壊？

魔導四輪は借りたんです

どうも。フェアリーテイル妖精の尻尾のスピアードです。

現在、列車から降りそこなったナツを魔導四輪で追いかけています。

俺が寝ているその頃、列車の中では……

「はあ……はあ……はあ……はあ」

ナツは、席に座っていた……そして、酔っていた。

そこに、誰かが声をかけた。

「お兄さん、ここ空いてる？……あら……つらそうだね、大丈夫？」

その時、その男はナツの右肩のマークに気付いた。

「あ、フェアリーテイル……正規ギルドかぁ………うらやましいなぁ……」

「……あ？」

ゴッ……！

すると、突然、その男がナツの顔に蹴りをかました。

「正規ギルドだからって調子乗ってんじゃねえよ………こちら、フェア

おかげで、ナツと男が転げ回った。

その時、男の懐に入っていた何かが落ちた。

三つ目のドクロをした笛だ。趣味悪いな…

「止まった……ん？何だこの笛？」

ナツが起き上った。そして、男の落とした笛に気付いた。

「見たな！」

男が、しまったというような顔をした。

だが、ナツは笛に興味を示さなかった。

「うるせえ…さっきはよくもやってくれたな…」

ドゴォッ！

右手に炎を纏い、男に重い一撃をお見舞いした。

「ぐもっ！」

情けない声を上げ、男が吹っ飛ぶ。

「ハエパンチ！」

「テメエ…」

男が起き上った。

その時、アナウンスが流れた。

「先ほどの急停車は誤報によるものと確認できました。間もなく発車します。大変ご迷惑をおかけしました」

「マズ……逃げよ！」

「逃げすかぁ！！アイゼンヴァルトに手エ出したんだ！ただで済むと思うなよっ！ハエがあっ！！」

「こつちも、てめえの顔覚えてぞ！！さんざん、フェアリーテイルをバカにしゃがって」

その時、列車が動き出した。

「今度は外で勝負してや……うぷ……」

「とう！」

ガシャア！！

そして、走る列車の窓からナツが飛び出した。

「おわあああああ！」

列車の横に魔導四輪が並走していた。

「ナツ！！？」

運転をしているエルザが叫んだ。

「何で列車から飛んでくるんだよお!!」

「どーなつてんのよお!!」

ナツが飛んできて、屋根にいるグレイのおでこに直撃した。

ゴチン!!

キキイイイイ

魔導四輪のブレーキ音で、俺は目を覚ました。

「バカモノおつ!!」

エルザがナツを殴っている。

何があつたんだ?

アイゼンヴァルト
「鉄の森は私たちの追っている者だ!!」

「そんな話初めて聞いたぞ」

「なぜ、私の話をちゃんと聞いていない!!」

酔つてたからじゃないか?

「さっきの列車に乗っているのなら今すぐ追っぞ!!」

そう言いながら、エルザはSEプラグを手首に付けた。

SEプラグは魔導四輪、魔導二輪などを走らせるための魔力を運転者からとる為のプラグだ。

「ナツ、そいつどんな特徴してたか？」

俺はナツに聞いた。

「あんまり特徴なかったな…あ、三つ目のドクロの笛を持ってた」

三つ目のドクロ…昔のミラなら似合いそうだな…

「三つ目の…ドクロの笛…」

ん？どうしたルーシイ

「ううん…まさかね…あんなの作り話よ…でも…
もしもその笛が呪歌^{ララバイ}だしたら…子守歌^{ララバイ}…眠り…死…」

「その笛がララバイだ！！呪歌^{ララバイ}…死の魔法！」

「何！？」

死の魔法だと？

「あたしも、本でしか読んだことないんだけど…禁忌魔法に呪殺つてあるでしょ？」

禁忌魔法だと……？

「ああ…その名の通り、対象者を呪い『死』を与える黒魔法だ」

ルーシイの問いにエルザが答えた。

「呪歌は、もつとおそろしいの…その笛の音を聞く者全てを呪殺する……集団呪殺魔法ララバイ!!」

マジかよ……!!

「集団呪殺魔法だと？そんな物がエリゴールの手に渡ったら何をされるか分かん!!すぐに追うぞ!」

エルザの命令と共に、魔導四輪に飛び乗り列車を追った。

やべ……眠くなってきた……

クヌギ駅

線路を挟んだ丘の上で、俺は目を覚ました。

「あいつ等、列車に乗ったの!!?」

ルーシイが声を上げる。

「みたいだね」

ハッピーが答える。

「馬車や船とかならわかるけど列車って…」

「あい…レールの上しか走れないし、奪ってもそれほどのメリットもないよね」

「ただしスピードはある」

目が覚めた俺は、会話に参加した。

「何かをしでかす為に、奴らは急がざるを得ないということか？」

屋根にいる 그레이が、質問してきた。

「たぶんな…… 그레이服着ろよ」

「また脱いだの?!」

ルーシイのツツコミは最強だな…

「でも、軍隊も動いてるし捕まるのは時間の問題なんじゃない？」

ルーシイが窓から顔を運転席のエルザに向ける。

「……だといいんだがな」

オシバナ駅

何だか、騒がしいな……

目が覚めると階段があり、沢山の軍人が倒れていた。

「……ん？ここどこだ」

俺は、 그레이の背中で寝ていたようだ。

「やっと起きたか… オシバナ駅だ。たぶんホームに鉄の森の連中が
アイゼンヴァルト
いるはずだ」

「魔導士相手に、軍の小隊かよ！話にならねえだろ！」

軍の上層部はそんなことも解らねえのか？下手すりゃ、死ぬんだぞ！

「急げ！！ホームはこっちだ！！」

그레이の指さす方に、エルザを先頭にして走る。

ホームは広がった。先程のクヌギ駅のホームとは天と地の差がある。

「やはり来たな妖精の尻尾
フェアリーテイル」

アイツがエリゴールか……

「な…なに…この数…」

ルーシイが震えている。

「……ざっと見、八十人ってどこだな……」

実際はもつと居るのだろう。

「待ってたぜえ」

列車の上に座っているエリゴールが声を上げた。

「奴はエリゴールか？」

エルザが聞いてきた。

「ああ」

「貴様等の目的は何だ？返答次第ではただでは済まさんぞ」

駅全体が揺れる。エルザの魔力が上がっている。

「遊びてえんだよ…仕事もねえし、ヒマなんだよ」

ふざけやがって……

再び駅が揺れる。さっきより、大きい揺れだ。

「スピア……少し魔力を落とせ。駅が壊れる」

エルザが俺に向かっていう。

「金髪の白い服……刀…そうか…お前が、闇ギルド潰しのスピアドだな…」

エリゴールが何かに気付いたように言う。

「だったら何だ？」

「いや…お前のおかげで同業者も減ったモンでね」

「知るか、そんな事」

エリゴールを睨む。

「ククク…良い眼だ……悪を憎む…闇を恨む眼だ」

「…お前等の目的は何だ？」

「まだわかんねえのか？駅には何がある」

駅にあるもの…列車…キヨスク…

エリゴールは空を飛んだ。

「飛んだ！？」

ルーシーが声を上げる。

「風の魔法だ！！」

ハッピーが答える。

エリゴールはそのまま飛んで、スピーカーの上で降りた。

列車…キヨスク…ルーシィ…変…ハッピー…猫…風の魔法…スピー
カ……

スピーカー?!まさか!!

「ララバイ呪歌を放送するつもりか!!?」

俺とエルザは同時に声を上げた。

「ええ?」

「何だと?」

「ふははははっ!!この駅の周辺には何百…何千ものヤジ馬共が集
まってる。いや…音量を上げれば町中に響くかな…死のメロディが」

「大量無差別殺人だと!!!」

エルザが叫ぶ。

「これは肅清なのだ…権利を奪われた者の存在を知らずに権利を掲
げ生活を保全している愚か者へのな。この不公平な世界を知らずに
生きるのは罪だ…よって死神が罰を与えに来た。死という名の罰を
な!!!」

「そんな事したって権利は戻ってこないのよ!!!てゆーか元々自分
たちが悪いってのに…あきれた人たちね」

ルーシィが正論を言った。

「ここまで来たらほしいのは権利^リじゃない権力^{リキ}だ……権力があれば全ての過去を流し、未来を支配する事だってできる」

「バカかお前」

俺はエリゴールに向かっていう。

「過去を流す？未来を支配する？人間はどんなに辛い過去でも、それを受け入れ未来^{あした}に進んで行くんだ！！進む事をあきらめた奴が、それを人のせいにするんじゃないやねえ！！」

「ククク…良いこと言うじゃねえか。でもよ、俺等は権力がねえと進む事もできねえんだ……カゲヤマ…」

エリゴールに名前を呼ばれた、カゲヤマは魔方陣を展開させ左手を床につけた。

「残念だな妖精^{ハエ}ども……闇の時代を見る事なく死んじまうとは！！」

カゲヤマの影がルーシィを襲う。

「きゃあ」

間に合わない！！

「やっぱりオマエかああ！！」

ナツの声と共に、カゲヤマの影が切れた。

「復活！！」

「今度は地上戦だな！！！」

カッコつけやがって……

「お！！なんか、いつぱいいる」

「敵よ敵！！ぜくんぶ敵！！」

「へっ！おもしろそうじゃねえか！！」

ナツが左の手の平に、右手の拳をぶつけた。

「こっちは妖精の尻尾最強チームよ！覚悟しなさい！！」
フェアリーテイル

ルーシィが指を差しながら言う。

「後はまかせたぞ……オレは笛を吹きに行く。身のほど知らずの妖精
アイゼンヴァルトどもに……鉄の森の……闇の力を思い知らせてやれい」
ハエ

そう言い残すとエリゴールは、窓を割り消えた。

「逃げるのか！エリゴール！！」

エルザが叫ぶ。

「くそっ！向こうのブロックか！？」

「ナツ！グレイ！！二人で奴を追うんだ！」

「「む？」」

「お前たち二人が力を合わせれば、エリゴールに負けるはずがない」

「なんでグレイなんかと……」

「なんでナツなんかと……」

ブツブツ文句言ってるぞ……

「ここは私とスパアでなんとかする」

「あたしは戦力外なのね……」

「オイラもだよ……」

「なんでグレイなんかと……」

「なんでナツなんかと……」

「聞いているのかっ!!」

「「もちろん!!」」

エルザが一喝すると、ナツとグレイは肩組みして仲の良いフリをした。

「行け!!」

「「あいさー」」

二人は走り去った。

すると、ナツと 그레이 の後を追いかけるようにカゲヤマと

もう一人がホームを出た。

「こいつ等を片づけたら、私たちもすぐに追うぞ!!」

「了解」

「うん」

「たった三人と猫で何ができる!いくら闇ギルド潰しだろうが、この数は無理だろうなあ?」

うるせえよ……

「行くぞ、スパア」

エルザの右手に魔方陣が展開され、剣が現れた。

「剣が出てきた!!魔法剣!!」

「めずらしくもねえ!!こっちにも魔法剣士はぞろぞろいるぜえ!!」

鉄の森の連中が武器を構えて、襲ってきた。

「ああ」

俺も刀を抜く。

まず、エルザが集団に突っ込んだ。

ズギャギャギャギャー！！

バシユツツツツツ！！

流石エルザ。たった三秒で、十五人は倒したな。

「チッ！遠距離魔法でもくらえ」

敵の一人が魔方陣から魔法弾を発射しようと、構えた。

エルザは剣を、槍に換装した。

「おこっ」

一人を槍で倒し、着地すると同時に

双剣に換装した。

スパアアアアン！！

また十人倒したな…

さらに、斧に換装する。

「斧！？」

敵の連中が驚いている。

「面倒だ、一掃する」

エルザの鎧がはがれ始めた。

「「「「うひょー！ー！なんか鎧がはがれてく！」「」「」」」」

敵の目がハートになっている。

まあ、当然だな……

後ろで、ハッピーとルーシイが会話している。

エルザの魔法の説明でもしているのだろう。

「舞え剣^{ツルギ}たちよ」

多数の剣が、エルザの背後で巡回している。

「サークルソード
循環の剣！！」

シュパイイン

ズバババババ！ー！

巡回する剣が、敵を切り刻んでいく。

十五人……って

「エルザ！一人多いぞ！！」

四十一人、一人オーバーだ。

「細かい事は気にするな……後は任せた」

すると、エルザは元の鎧に戻った。

「解った……」

そう言い、残りの奴らに突っ込む。

「追憶・剣閃！！」

ズババババツンンン！！！！

「何だコイツ！！？たった一撃で二十人も倒したぞ！！」

後、十三人といったところか。

刀に、紫電をまとわせる。

「追憶・雷神剣！！」

バチバチバチツツ！！！！

ふう……

「ひー」

一人逃げていく。

「エリゴールの所に向かうかもしれん。ルーシィ追うんだ」

「ええ〜〜!!あたしがっ!?!」

「頼む!!」

「はいいつつ!!」

ルーシィが走っていく。

「ハッピー、お前も行け」

魚を食べようとしている、ハッピーに言った。

「え〜オイラも?」

「今度、特上の魚を持って帰ってくるからよ」

「あいさ〜!!」

ハッピーも飛んで行く。

「さて、エルザ：魔導四輪に循環の剣のコンボ。流石に魔力が無い
だろ」

エルザを支えながら言う。

「ああ。私は、スピアのように二人分の魔力はないからな」

「嫌味か？」

「いや……今、アオイは……」

エルザが俺の背中の刀に目をやる。

「今は寝てる。剣閃に雷神剣を使ったから、魔力の消費が激しいんだ」

「そうか……」

それから、俺もエリゴールを搜索したが一向に見つからない。

直ぐに、駅のホームに戻ったがエルザは居なかった。

「おい、エルザはどこに言った？」

倒れている鉄の森の連中に聞いたが誰も知らない。

今度はエルザを探していると、ちょうどメイド服の女が

地面を掘っていた。

「あ！スピアが来たよ！」

「何があつたんだ？」

見ると、ナツとグレイは怪我を、カゲヤマって奴は大怪我をしている。

「おし！！あの穴を通ってくぞ！！」

何でだ？普通に出来ればいいじゃん。

穴を通り、駅の外に出ると駅が風で囲まれていた。

「何だ、コレ？」

「エリゴールの魔法、魔風壁だ」

俺の質問にグレイが答えた。

「ナツとハッピーはどうした？」

エルザが辺りを見渡しながら言う。

「ナツの事だ、エリゴールを追いかけたんだろう」

グレイが言う。

って、服着ろよ。

「よし、追いかけるぞ！！」

「追いかけるってどうするの？」

ルーシイが聞いた。

「早く乗れ!!」

エルザが魔導四輪の運転席に座っている。

「エルザ……それどうしたんだ？」

俺が聞いた。

「借りたんだ……」

本当かよ？

それから、魔導四輪に乗りナツを追いかけた。

眠い…

ゼレフ書の悪魔（前書き）

早く、スピアードの過去話が書きたい

ゼレフ書の悪魔

こんにちは妖精の尻尾フェアリーテイルのルーシィです。

今、エリゴールを追っているナツとハッピーを追っています。

って言うか、追いつきました。

「ナツ〜」

ルーシィの声で俺は目を覚ました。

エリゴールが倒れている。どうやら、決着がついたようだ。

「そ……そんなー！エリゴールさんが負けたのか！？」

カゲヤマが驚いている。

「さすが、ナツだな」

まさか、あのナツがエリゴールを倒すなんて、驚きだ。

「こんな相手に苦戦しやがって。妖精の尻尾フェアリーテイルの格が下がるぜ」

グレイがナツに突っかかる。

グレイ、今日誰かと戦ったのか？

「苦戦？どこが、圧勝だよ。な、ハッピー」

「微妙なトコです」

微妙なんだ……

「おまえ…裸にマフラーって変態みてーだぞ」

「おまえに言われたらおしまいだ」

「ごもつともです。」

「ルーシィ、服貸してくれ」

「何であたしなの!!?」

ナツが俺を見ってくる。

「いや、貸さねえよ!!?」

「何はともあれ、見事だナツ。これでマスターたちは守られた。ついでだ…定例会の会場へ行き、事件の報告と笛の処分についてマスターに支持を仰ごう」

エルザの提案が、最善だな。

「よし、行くか」

グレイが言う。

「また、車かよ……」

また寝ちまうじゃなかよ。

ん？

「危ない！！」

俺の声と共に、ナツ、グレイ、エルザ、ハッピーが反応する。

反応が遅れたルーシィを、ハッピーが引っ張る。

直前までルーシィが居た場所を、魔導四輪が疾走する。

運転しているのはカゲヤマ。ララバイを持っている。

「油断したな、妖精^{ハエ}ども。笛は…呪歌^{ララバイ}はここだー！！ざまあみろー
ー！！」

カゲヤマって……ええええ？？

「あんのヤロオオオ！！」

「何なのよ！助けてあげたのにー！！」

「追うぞー！！」

「あいさー！！」

「走るのがよー！！」

全員が一斉に叫んだと同時に、走り出す。

クローバーの町 定例会会場の裏

カゲヤマは、窓に映る大勢の人物を見て一息つく。

「（よし…定例会はまだ終わってないみたいだな。この距離なら十分呪歌の音色が届く。ふふふ…ついにこの時が来んだ…）」

ポン

肩に手が置かれた。

ビクビクしながら、後ろを振り向くと

一人の人物がいた。

「（マカロフ…！！こいつ…妖精の尻尾のマカロフだ…！！ちっ…
つくづく妖精^{ハエ}に縁がある一日だな）」

「あ…あの…」

「ん？」

「一曲…聴いていきませんか？誰かに聴いてほしいんです」

ララバイを構えて言う。

「気持ち悪い笛じゃのう」

「見た目はともかく、いい音が出るんですよ」

「……急いんどるんじゃ。一曲だけじゃぞ」

「ええ…（勝った!）」

「よく聴いてくださいね」

その時、頭の中で記憶がめぐる……

「（正規のギルドは、どこもくだらねえなあ!!）」

「（能力、低いクセにイキがるんじゃないやねえっての!!）」

ギルドのメンバーの声が頭に響いた…

「（これは、オレたちを喰らい闇へと閉じ込め…生活を奪いやがった魔法界への復讐なんだ!!）」

次は、エリゴールの声だ……

その時、駅でルーシイとか言う奴が言ってた事が響いた。

「（そんな事したって権利は戻ってこないのよ!!）」

ドクン……

次は、エルザが魔風壁の事で言ってた事……

「（カゲ！お前の力が必要なんだ！！）」

次は、駅でナツが言ってた事だ……

「（同じギルドの仲間じゃねえのかよ！！）」

クツ…何なんだこれは……！！

「いた！！」

그레이가指をさす方向に、マスターとカゲヤマがいた。

「じっちゃん！！」

「マスター！！」

「しっ」

おわっ！！

「今いいトコなんだから見てなさい。てかあんなたち、かわいいわね…ウフ」

「な…何この人！？」

「ブルーベガサス青い天馬のマスター！！」

「あら、エルザちゃん大きくなったわねえ」

「お久しぶりです」

「スピアード君もよりかわいくなっ たわねえ」

その時、マスターの声が聞こえた。

「どうした？早くせんか」

カゲヤマは震えている。

「いけない！！」

エルザが駆け出そうとする。

「黙ってなって。面白^{おもしれ}エトコなんだからよ」

クワトロケルベロス
「四つ首の番犬のマスター！！」

ルーシイが叫んだ。

「ゴールドマイン！？」

エルザが気付いたようだ。

「お久しぶりです」

その時、再びマスターが声を上げた。

「さあ」

「（吹けば…吹けばいいだけだ。それで、すべてが変わる！！）」

「何も変わらんよ」

「！！」

「弱い人間はいつまでたっても弱いまま。しかし、弱さの全てが悪ではない。もともと、人間なんて弱い生き物じゃ…一人じゃ不安だから、ギルドがある、仲間がいる。強く生きる為に寄り添い合って歩いていく。不器用な者は人より多くの壁にぶつかるし、遠回りをするかもしれん。しかし、明日を信じて踏み出せば、おのずと力は湧いてくる。強く生きようと笑っていける…そんな笛に頼らなくても…」

「（さすがだ…すべてお見通しだったか…）」

「参りました」

マスターの前にカゲヤマは膝をついた。

「マスター！」

「じっちゃん！」

「じーさん！！」

エルザ、ナツ、グレイが声を上げ、マスターに近寄った。

その後を、ルーシィとハッピーが追いかける。

「ぬおおお！？なぜこの三人がここに！？」

「じつちゃん、スゲエなア」

ナツがマカロフの頭を叩く。

「そう思うのならペシペシせんでくれい」

「一件落着だな」

「グレイ、服きろよ」

「あい！」

「ホラ……アンタ、医者行くわよ」

ルーシイがカゲヤマに言う。

「……」

「よくわからないけど、アンタもかわいいわよ」

「カカカ……いつもこいつも、根性のねえ魔導士どもだ」

どこからか、声がした。

人間の声じゃないな……誰だ……？

「もうガマンできん。ワシが自ら喰ってやろう」

笛から煙が上がっていき、巨大な化け物が現れた。

足だけで、民家並みの大きさがある。

腹にあたる部分は三つの穴が開いてあり、

顔は笛と同じく三つ目になって、角がある。

なんだコイツ……

「貴様等の魂をな……」

「……怪物ー！！」

ナツ、グレイ、ルーシィ、ハッピー、マカロフ、俺が同時に叫んだ。

「な…何だ！？こんなのは知らないぞー！！」

カゲヤマが驚いている。

「あらら…大変」

「こいつァ『ゼレフ書の悪魔』だー！！」

ゼレフだと???

「腹が減ってたまらん。貴様等の魂を喰わしてもらっぞ」

「なにーっ!!」

ナツが声を上げる。

「魂って食えるのかー!?」

「知るか!」

グレイが突っ込む。

「お前ら、そんな状況じゃねえぞ……」

ナツとグレイに言う。

「一体……どうなってるの? 何で笛から怪物が……」

ルーシーが言う。

「あの怪物が呪歌ララバイそのものなのさ。つまり、生きた魔法。それがゼレフの魔法だ」

ゴールドマインが言う。

「生きた魔法……」

「ゼレフ?! ゼレフって、あの大昔の!」

「『黒魔導士ゼレフ』、魔法界の歴史上最も凶悪だった魔導士だ」

「何百年も前の負の遺産がこんな時代に姿を現すなんてねえ」

エルザ、グレイ、俺、ボブの順で言った。

「さあて…どいつの魂から頂こうかな……」

ララバイが見下ろしながら言った。

「決めたぞ……全員まとめてだ」

すううううう

何かを吸っている。

「いかん！！呪歌じゃ！！」
ララバイ

マカロフが叫ぶ。

やばっ！！

「ハッピー！ルーシィ！マスター達とカゲヤマを頼む！！」

俺は叫んだ。

「あいさー！！」

「ナツ！グレイ！エルザ！行くぞ！！」

「燃えてきたあああ！！」

「任せとけ！！」

「ああ！」

四人同時に走り出す。

「換装・天輪の鎧！！」

スバアアア！！

ララバイの足を、エルザが斬る。

「おりゃあああああ」

ナツがララバイの足を昇り、顔面に蹴りを食らわせる。

「アイスメイク……」

グレイが両手を伸ばし、重ねる。

「ランス 槍騎兵！！」

氷の槍が、ララバイの体を破壊する。

「がああつつ」

ララバイが唸る。

「鳴り響くは招雷の轟。天より落ちて灰燼と化せ！」

俺が右手を真上に伸ばし、紫電を上空に放出する。

ララバイの頭上に魔方陣が現れる。

「レイジングボルトオオ！」

魔方阵に紫電が落ちる。

「**があああ！！**」

「次で決めるぞ!!」

「「「！おー」「」「」

「換装・黒羽の鎧！！」

「アイスメイク・大槌兵！！」

「火竜の鉄拳！！」

「紫電方天戟！！」

[illegible]

「バ……バカな……」

激しい轟音と共に、
ララバイが崩れ落ちる。

定例会会場を壊して。

「見事！！」

「ゼレフ書の悪魔をこつもあつさりと……」

「これが……妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士……」

マカロフ、他ギルドのマスター、カゲヤマの順で言った。

「ふう」

流石に、魔力を使いすぎたか……

あ…刀、拾いに行かないと……

「どうじゃー！！すごいじゃろお！！」

マカロフが何か、自慢している。

「ま、経緯はよく分らんが、フェアリーテイルには借りができたなあ」

「ふむ」

「しかし、これは……」

マスター達が、定例会の会場があつた場所を見ている。

「あ……」

「ははっ！！見事にぶっこわれちまったなア」

「捕まえるー!!」

マスター達が叫ぶ。

「やばっ!」

「逃げるぞ!お前ら!」

「マスター申し訳ありません…」

俺、グレイ、エルザの順で言った。

「おし、捕まえてやる!!」

「お前は捕まる側だー!!」

その後、多額の請求書がギルドへ届いたのは言っまでもない。

ラクサス登場（前書き）

名前：ミハエル・ベンフォード

年齢：19歳

性別：男

好きなもの：カレー

嫌いなもの：猫

評議院 機密情報 調査室勤務。バロンに家族を殺されており、その為かバロンの情報をスピアに流す。
時たま、メガネをかける。

ラクスス登場

クローバーの町から帰還して、二日。

俺は自宅で寝ていた。てか、起きた。

ボサボサの髪を整えながら、壁に立てかけてある刀に声をかける。

「アオイ、起きろよ」

顔を洗って飯を食い、歯を磨く。

ルーナセラフィの服を着て、刀を背負う。

それから、ギルドに向かう。

「おはようございます」

マカロフに声をかけたが、反応がない。

「うーんうーん」

「あら、おはようスピーア」

後ろから声がした。振り向くと、ミラだった。

「ミラか。おはよう」

「マスターはこの前の、定例会会場の修理費用の金額が高すぎて払

えないって悩んでるの」

「あらら……ちなみに、いくらぐらい？」

ちよつと聞くのが怖い。

「一千万」よ」

S級クエスト約五つ分だな。

「あ、スパア。評議員のミハエルって人が、話があるって」

ミラが、思い出したように言う。

「話？」

「マグノリア駅で十時につて、連絡があつたの」

「解つた」

二時間後　マグノリア駅

駅の前で、待っていると肩を叩かれた。

黒い髪に白いＴシャツの男だった。

「お久しぶりです」

ミハエルが話しかけてきた。

「ミハエルさん、話つてのは？」

ミハエルは辺りを見渡して言った。

「ここじゃ話にくいんで」

それから、俺とミハエルは駅近くの自宅へ向かった。

「そういえば、鉄の森の連中はどうなりました？」
アイゼンヴァルト

自宅で、ミハエルは椅子に座り、俺は飲み物を準備していた。

ミハエルは五年前、軍隊を離隊し、評議院に入院した。

現在は機密情報調査室に所属している。

「現在、裁判中です……まあ……おそらく全員、実刑でしょうね……
カゲヤマは怪我が治り次第、裁判です。エリゴールは……」

「逃亡中ですか？」

「はい。おそらく、オラシオンセイイス六魔將軍に匿われているのではないかと……」

ミハエルは、スピアの用意した飲み物を飲んで続けた。

「スピアードさん……今回の事件、やはりバロンが絡んでました……」

マジか……

「呪歌の入手経路について、カゲヤマに事情聴取をしていると判明しました」

「カゲヤマは解除魔導士だったと思うんですが？」

「呪歌は、評議院管理下の施設で厳重に保管されています。並大抵の魔導士じゃ解除できません」

ミハエルはさらに続けた。

「カゲヤマとその他のメンバーの供述をまとめると、事件の数日前
呪歌や定例会の情報を黒い紳士服の男が提供してきたらしいんです」

「そうですか……」

俺は、本棚の上に丸めて置いてある、古びた地図を広げた。

「呪歌の保管施設は？」

「ここです」

ミハエルが指さした位置に、ペンで丸印をつける。

そして、矢印を引っ張って『バロン 呪歌を盗む』と書き込んだ。

「それから、新しい情報なんですが……」

「はい」

「三年前、フラーゴで大きな凍りの塊……おそらくデリオラだと思

われる物を運んでいる集団を見たと言う情報の中に、バロンの特徴と一致する人物がいました。その集団は、そのままガルナ島に行つたそうです」

ガルナ島。確か、悪魔の島だったな……

地図に書き込む。

「それにしても、こんなに情報を流して良いんですか？」

「まあ、犯罪行為ですよ……でも、バロンを……黒い天使達を壊滅させる事ができるなら、俺は捕まっても良いんです」

六年前、初めて会った時は知らなかったが

ミハエルは家族をバロンによって殺されている。

「じゃあ、そろそろ失礼します……仕事抜け出してきたんで」

ミハエルを送りだした後、地図を持って、再びギルドへ行く。

フェアリーテイル ギルド内

扉を開けて、中に入る。

カウンターでコップを拭いているミラに声をかけた。

「ミラ、酒を一杯」

マスターはまだ唸っている。

酒の入った、コップを持って、二階へ上がる。

あ、俺一応三年前からS級魔導士です。

丸テーブルにコップを置き、地図を広げる。

改めて、バロンの行動パターンを探ろうとするが分からない。

大陸の北で事件を起こしたかと思えば、南で事件を起こす。

一体何がしたいんだ？

「よお、スパイ」

声をかけてきたのは、金色で短髪の男。

耳にはヘッドフォンを付けている。

「なんだ……ラクサスか…脅かすなよ」

「んなつもりはねえよ。お前、まだそれやってたのか」

「悪いかよ」

「いや……」

そう言うとラクサスは地図の一部分を指でさした。

「ここでも、奴の目撃情報があった…」

「お前…」

「勘違いするなよ。こんな所で、辛気臭せえ顔されちゃあ酒がまずくなるんだよ…」

ラクサスの示した場所に丸印を付ける。

下では、ハッピーが「終了了了」って叫んでる。

ん？

「なあ、ラクサス……眠くねえか？」

「ああ……ミストガンだな……」

ミストガンはどういう訳か、誰にも姿を見せたくないらしく、仕事をとする時はいつも全員を眠らせる魔法を使う奴だ。

階段を降りて、ミストガンの元へ駆け寄る。

「久しぶりだな、ジェラル」

「……その名で呼ばないでくれ」

俺がミストガンと初めて出会ったのは、七年前。

バロンへの復讐の為に、旅をしていた頃

とある出来事で、彼と出会った。彼も旅をしていたようで、その時は小さな女の子と一緒にだった。

その女の子がミストガンをジェラールと呼んでいた。

俺が、フェアリーテイル妖精の尻尾に入って、再開した時には既に顔を隠し

ミストガンと名乗っていたが、声で解った。

ラクサスは、ミストガンをアナザージェラールと呼んでいた。意味は知らない。

「……スピア」

ミストガンが紙の束を渡してきた。

「……あの男の情報だ…使ってくれ」

「……ありがとう」

正直、涙がでそうだった。二年前、ラクサスやミストガンはもっと前だが、全ての過去をギルドのメンバーに打ち明けた後、

マカロフをはじめ、ギルドのメンバーがバロンについての情報を集めてきてくれるようになった。

そのおかげで、地図はほとんど真っ黒だ。

ジェラール…ミストガンは、リクエストボード依頼板の依頼書を取り、マカロフに渡した。

「行ってくる」

「これっ！！眠りの魔法を解かんか！！」

ミストガンが出ていった後、ギルドのメンバーは目を覚ました。

グレイが、ルーシィにミストガンの説明をしている。

「オレは知ってっぞ」

ラクサスが二階から声を上げる。

「ラクサス！」

「いたのか！」

「珍しいな！！」

いや、ラクサスは基本的に二階にいるけどね。

「ラクサスー！！オレと勝負しろー！！」

ナツ、俺に勝てなきゃ、ラクサスには勝てねえよ。

「そうそう。エルザに勝てねえようじゃ、スピアにすら勝てねえよ」

「どういう意味だ」

エルザ、怖いよ…

「オレが最強ってことさ」

「降りてこい！！この野郎！！」

「おまえが上がってこい」

「上等だ！！」

チッ

「レイジングボルト！」

ナツに紫電が落ちる。

「ナツ！二階には上がるな」

「ははっ！！怒られてやんの」

「ラクサスも落ち着け」

「妖精の尻尾最強の座は誰にも渡さねえよ。エルザにも、ミストガ
ンにも、
あのオヤジにもな」

ラクサスが俺を指さした。

「スピア、お前もだ。オレが…最強だ！！」

そう言うと、奥に引っ込んだ。

はあ…ったく。

「皆、すまない。ラクサスも反抗期なんだ」

「まあ、スピアが言うならいいけどよお」

「ねえミラさん。聞きたいんですけど」

「なあに？どうしたのルーシィ」

「さつき、スピアードさんがラクサスって人の代わりに誤ってたけど…」

「ああ。スピアはラクサスの弟子なのよ」

「弟子？！」

「そう。このギルドでラクサスと対等に戦えるのはマスターとスピアだけ」

「謙遜するなよ、ミラ」

後ろを振り向くとスピアがいた。

ルーシィとミラが会話してたので参加してみた。

「ルーシイ、知ってるか？ミラは昔、魔人って恐れられたんだぜ」

「えっ！？本当ですか？」

「昔の話よ。今は、スピアにはかなわないわ」

「いや、だから謙遜するなって」

「あ、そうだ。さっき、スピアドさんが言ってた、二階に上がってどういう意味ですか？」

「スピアでいいさ……二階には一階とは比べものにならないくらい難しい仕事がついてある」

「そう。S級の依頼クエスト」

「一瞬の判断ミスが死につながる危険な仕事だ。まあ、その分報酬もいいがな……あ、ミラ酒くれ」

「はいはい」

ミラが酒を注ぎ、ながら言う

「S級の仕事は、マスターに認められた魔導士しか受けられないの。資格があるのは、エルザ、ラクサス、ミストガン、スピアを含めて六人しかいないのよ」

「へえ」

「S級なんて、目指すもんじゃねえぞ。命がいくつあっても、足り

ない仕事ばかりだからな」

「みたいだね」

この日の夜、ルーシィがS級クエストに行くなんて俺は想像していなかった。

昔の話

「ふわあ〜」

大きなあくびをしながら、家を出る。

ギルドに向かって歩いていく。

ギルドの扉を開けようとすると、中が騒がしい事に気付いた。

「なあ、何か騒がしくないか？」

「うん。いつもより、違った騒ぎだよね」

扉を開けようとした瞬間……

バタンツツ

顔面に激しい衝撃が走った。

勢いよく、扉が開いた。

い……痛デエエ……

中から出てきたのは、エルザだった。

「っ……エルザ、どうした？」

エルザの声をかける。

「！！……何だスピアか。丁度良い……付いてこい」

エルザがキレてる……

「何があつたんだ？」

エルザが走ったので、俺も追いかけながら言った。

「ナツ、ルーシー、ハッピーが勝手にS級のクエストに行った！
！止めに行ったグレイも戻ってこない！！」

……勝手に……S級だと……

「場所は何？」

「悪魔の島……ガルナ島だ」

ガルナ島！！バロンの目撃情報があつたところだな。

「よし……あのバカ共を連れ戻そう……ガルナだところから二日はかかるな」

二人は駅の前で止まった。

「列車で、ハルジオンに行き、そこから、船でガルナ島へ行く」

エルザの指示に従い、列車に乗った。

……眠い……

列車内

「勝手にS級なんて、昔のスピアみたいだな……」

エルザが言う。スピアは向かいの席で寝ているが、構わない。

それにアオイが応答してくれる。

「そうだね……あの時は確か、凶悪モンスター『ラクリマホーン』の退治だったよね。スピアの紫電も、刀も全然通用しなかったもんね」

「ああ。あの時は、私やラクサス、ミストガンも仕事でいなかったな……」

「マスターが助けに来んだよね」

「そうなのか？それは初耳だ」

「マスターは『高みを目指すことは悪くない。敵をとろうと、強くなるのも悪くない。しかし、その為に命を落とすなど馬鹿げておる』って」

「流石、マスターだな」

そんな話をしていると、ハルジオンに到着した。

「スピア！起きろ！」

「ん？ああ」

目が覚めた俺は、直ぐにエルザを追う。

「なあ、エルザ。どうやって海を渡るつもりだ？」

「！！」

「……考えてなかったのかよ…エルザらしいな」

そう言いながら、近くにいた船乗りに話しかけた。

「ガルナ島？勘弁してくれ、名前も聞きたくねえ」

他の船乗りたちも、皆行きたくないで行った。

「エルザ、どうする？」

「仕方ない……手荒なマネはしたくなかったんだが」

そう言い、近くにいた海賊に声をかける。

「は？ガルナ島、行くわけねえ……嬢ちゃん、ケガするぜ」

手を振りながら、あっちに行けと行っている。

「そうか…」

そう言うとエルザは、剣を、おそらく船長であろう豚鼻男の首に、

切先をあてた。

「今すぐ、船をだせ」

おい、エルザ…怖い…

「おいおい、嬢ちゃん、威勢がいいねえ……」

海賊船の戦闘員がエルザを囲む。

「でも、この数相手にはできねえだろ」

確かに数は多い。

仕方ない……

右手を頭上に挙げる。

「レイジングボルト！」

グワアアアと叫ぶ声と同時に、戦闘員が倒れる。

「余計な世話だったか？」

「いや、助かった……さあ、船長どうする？」

「わっ……解った。ガルナ島だろ…直ぐに船を出す…乗ってくれ」

こうして、海賊船に乗りガルナ島へ向かった。

アレ……眠い……

目が覚めると、いつのまにか夜になっていた。

前方には、ガルナ島が見えはじめていた。

海岸で、大きな津波が起きてる。

あれって……

「エルザ！」

船の看板で腕を組んでいるエルザを呼んだ。

「アレ、ルーシイじゃないか？」

海岸を指さす。

すると、同時に大きな熊みたいな生物が

ルーシイに飛びかかっている。

「エル……ってもういねえ！！」

海岸を見ると、既に熊みたいなのは倒されている。

船が島に到着した。

「じゃ、ここで待機しててくれ」

「了解しました！！スピードさん！！」

海賊達の声聞きながら、エルザ達の元へ向かう。

その瞬間、何かを感じた。

これは……

ルーシィとエルザもめている。

「あたしたち……なんとかこの島の人たちを救ってあげたいんだ」

「興味がないな」

「じゃ……じゃあせめて最後まで仕事を……」

ルーシィが言いかけたが、エルザが剣を突きつけ言った。

「仕事？違うぞルーシィ。貴様等はマスターを裏切った……ただですむと思うなよ」

「エルザ、落ち着けて……」

エルザの剣をつかみ、下げる。

「ルーシィ、島の人を救いたいと言うお前は立派だ。そして、仕事を最後までしたいと言った……だがなこれは仕事じゃないぞ。受理

されてないしな……お前らは勝手な行動をしたんだ…自覚しろ」

ルーシーがビビってる。

俺は、魔力を上げる。

アイゼンヴァルト
「鉄の森の一件で、一端の魔導士にでもなったつもりか？あの程度の依頼は、
リクエストボード

一階の依頼板に沢山ある。お前らはまだまだひよっ子なんだ……」

魔力を下げる。

「……エルザ、ナツとグレイを探してくる」

「…解った」

それから、近くの森に入る。

草の量も多く、虫が沢山いる。

森の奥深くまで入ったところで、足を止める。

「いるんだろ？バロン」

少し大きな声で言う。

「お気づきでしたか……十年ぶりですね」

目の前に一人の男が立っていた。

黒い紳士服の男。右手の手のひらには、

ハートマークの両端に天使の羽、そのマーク全体に大きくバツ印が

描かれている

ブラックエンジェルス

黒い天使達のギルドマークがあつた。

「いつから、私がこの島に居ると?」

「最初、この島に来た時だ。大きな魔力を感じた……いわゆる邪気だな……」

この島は、悪魔の島だ。最初は彼らかと思つたが、俺が魔力を上げた時

同じように魔力が上がつた。そして、その魔力はあの時……お前がおやつさんと戦つた時と同じだつた……」

「なるほど、流石ですね」

いつの間にか、バロンは後ろにいた。

「っ!?!」

急いで離れて、距離をとる。

「……バロン。お前は何故この島に……デリオラを運んだのもお前だろ」

「ええ。三年前です、零帝と名乗る男が私を訪ねてきましてね……ある物を運んでもらいたいと」

「……」

刀を抜き、バロンに斬りかかる。

しかし、手前で何かに押さえつけられた。

地面にうつ伏せで落下する。そして、地面にクレーターができる。

「クツ……グラビトン重力魔法か……」

「十年も経つのでね、少々強力になりました」

「……そのようだな……」

右手を突き出し、紫電を飛ばす。

しかし、それも当たらなかった。

バロンの姿はもうなかった。

「……紫電ですか。いつの間に、そんな魔法を？」

どこからか声がする。

「お前を殺す為に、習得したのさ……」

「フフフ……しかし、無駄のようですね……その魔法は五分後に解けます」

声がだんだん聞こえなくなってゆく。

「オイ！待て！まだ終わってねえ！……」

「私は、この後も予定がありましてね……大丈夫ですよ、まだこの島にいますから……」

いつでも相手になって差し上げます。では……また」

バロンの声は完全に聞こえなくなった。

「クソっ!!」

重力魔法で起き上がる事は、出来ないが

多少、体は動く。

首にのネックレスを取り出し、強く握る。

「すいません……おやっさん……」

目の前に落ちている、刀の柄を握る。

「すまねえ……アオイ……」

「俺は……まだ弱え……」

土が涙と血で汚れていく。

昔の話（後書き）

Baron登場させたら、全然進まなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4769z/>

FAIRYTAIL ~ 過去の記憶は未来の希望へ ~

2012年1月5日17時53分発行